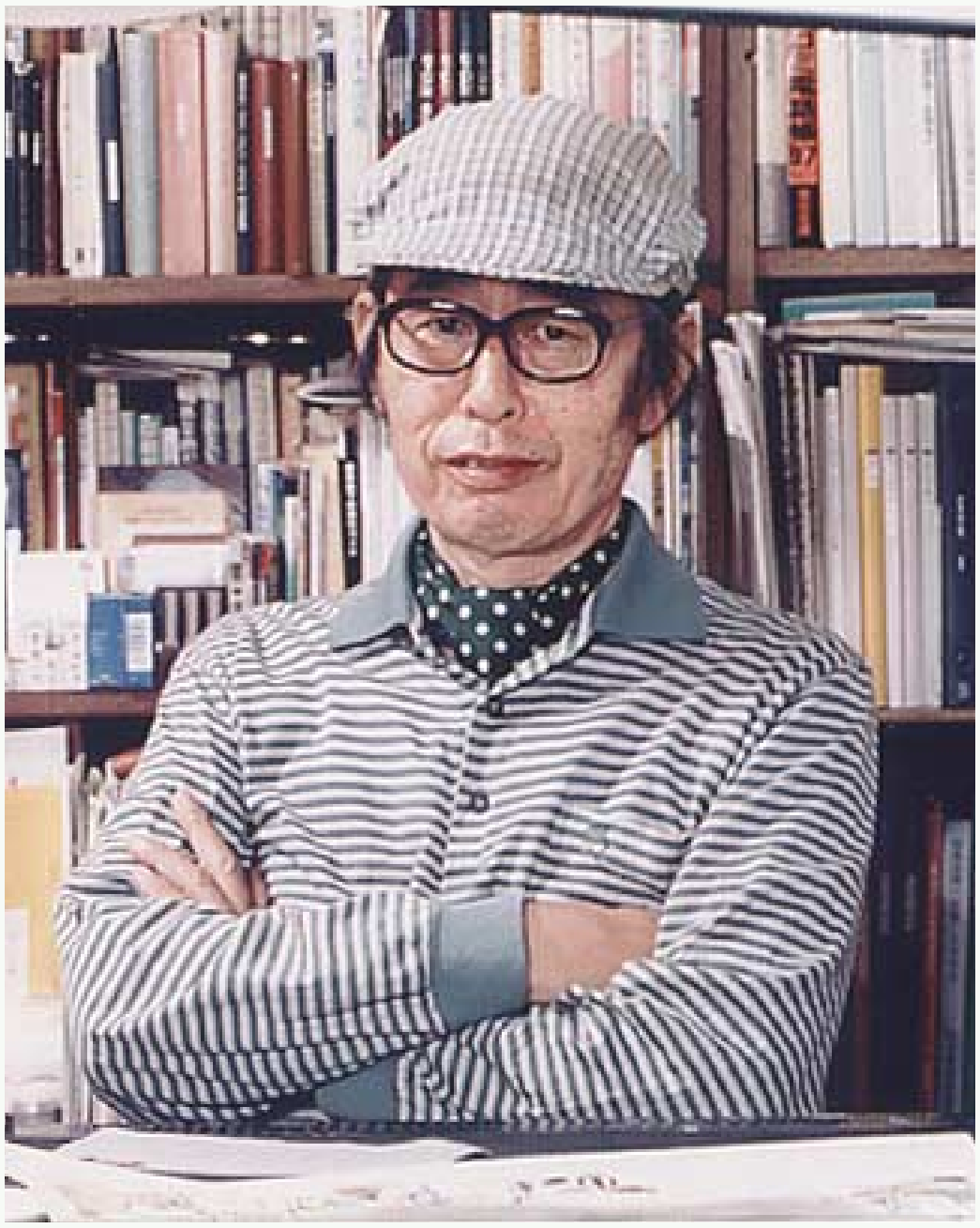
特集

真鍋博氏の贈り物



本市（土橋）出身で、日本を代表するイラストレーターであった真鍋博氏が亡くなられて1年あまりがたちました。

生前の真鍋氏の世界的な活躍・功績については、今さら申し上げるまでもありませんが、真鍋氏が郷土・愛媛、そして新居浜をこよなく愛されていたことや、真鍋氏の作品が私たちの周りに数多く残されていることは案外知られていないのではないでしょうか。

そこで、今月号の市政だよりでは、真鍋氏が郷土新居浜に残された作品の数々を紹介するとともに、生前親交のあった方々の真鍋氏にまつわるエピソードを通して、真鍋氏の人柄やふるさとへの熱い想い、真鍋氏が描き続けた未来社会・21世紀とは何だったのか、検証してみたいと思います。

真鍋博の足跡をたどる

日本を代表するイラストレーター真鍋博氏の類希（たぐいまれ）なる才能は、どのような環境の中で育まれ、そして開花したのでしょうか。その足跡をたどってみましょう。

■少年時代（新居浜）

真鍋氏は小さい頃から絵が大好きで、3歳の頃から絵ばかり描いたそうです。性格はおっとりとしていましたが、手先が器用でいろいろな物を作るのが好きな少年でした。家の中には、別子銅山の工作所長をされていた父親の富太郎氏の建築雑誌があり、博少年もそれをよく見ていたそうで、後に氏がよく描く立体的なものの見方や鳥瞰図に対する興味を持ち始めたのもこの頃だそうです。

高校時代は美術部に在籍し、絵を描いていましたが、卒業の頃には、美術学校に行って絵描きになりたいという夢が膨らんでいました。

西高時代の作品（人物画・水彩）

■大学時代（多摩美術大学）

東京の多摩美術大学に進み油絵を学んだ真鍋氏は、3年の頃には二紀会の展覧会に出品して新人賞や二紀賞を受賞するなど、新進気鋭の画家として活躍され、卒業の頃には二紀会の会員になっていました。

■教員からイラストレーターへ

卒業後、東京都港区立赤坂中学校の美術教師をしながら油絵を描いていた真鍋氏は、油絵という狭い世界に飽き足らなくなり、学生時代に知り合った池田満寿夫、久里洋二らとグループ「実在者」を結成。2、3年で教師を辞め、イラストレーターに転身されました。

その後、舞台美術、アニメーション、映画、グラフィックデザイン、挿絵のほか、新聞、テレビでの文明批評、講演・著作活動など、多方面で活躍されました。また、ふるさとへの熱い思い入れにより、本市に多くの作品を残されています。

兄 真鍋博を語る

田坂冨美子さん
（庄内町）

兄が高校生の頃、「絵のモデルになれ」と言われて、日曜日に西高の美術部へ行ったことがあった。大学に入ってからも帰省すると西高の美術部に飯尾時春先生を訪ね、私をモデルに絵を描いていた。小遣いも少なかったと思うのだが、西高の横にあった山小屋という喫茶店でコーヒーを飲ませてくれた。これが私とコーヒーとの初めての出会いである。

父は、兄の美術学校行きに反対であった。それは、あの時代絵の道で生きることの厳しさを案じてのことだったと思う。父は兄のために好きなタバコも止めて仕送りを続けていた。その父も昭和45年に68歳で亡くなった。父の死後、毎月母宛に姉の手紙を添えて現金書留の仕送りを続けた兄も、父と同じ年齢で亡くなった。人生を凝縮して全速力で走り終えたのだろうか。

真鍋博氏の略年譜

1932年（昭7）　愛媛県宇摩郡別子山村に生まれ、3歳から新居浜市で育つ。
1948年（16歳）　新居浜西高等学校に入学。
1952年（20歳）　第6回二紀会展に初出品。
1954年（22歳）　現多摩美術大学油画科卒業。新居浜・別子大丸で「第1回真鍋博個展」を開催。
1955年（23歳）　池田満寿夫らとグループ「実在者」を結成。松山・伊予鉄ホールで「真鍋博個展」を開催。
1960年（28歳）　朝日ジャーナル連載「第七地下壕」で第1回講談社さしえ賞受賞。
1961年（29歳）　光文社「英語に強くなる本」の挿絵担当。戦後最大の発行部数になる。久里洋二、柳原良平と「アニメーション3人の会」を結成、草月アートセンターで発表会。
1964年（32歳）　ニューヨーク世界博日本館にイラスト壁画を出展。
1967年（35歳）　モントリオール万国博を取材し、朝日新聞に絵と文を連載。サンデー毎日に「真鍋博の鳥の眼」連載。
1970年（38歳）　日本万国博三菱未来館の起案に、星新一、福島正美と参加。万博開催記念たばこのパッケージデザインやガイドマップを手がける。
1972年（40歳）　沖縄国際海洋博テーマ委員。
1974年（42歳）　星新一の作品集全18巻装幀。
1975年（43歳）　作品集「真鍋博オリジナル'75」を講談社より刊行。
1979年（47歳）　国際児童年記念切手のデザイン。「真鍋博の線の画集」を刊行。
1981年（49歳）　ポートピア'81三菱未来館の起案に参加。
1983年（51歳）　科学万博三菱未来館の起案に参加。星新一との共著で、「真鍋博のプラネタリウム」を刊行。
1984年（52歳）　「真鍋博オリジナル'85」刊行。
1985年（53歳）　科学万博つくば'85プランニングスタッフを務める。

真鍋博氏の思い出

■熱かった郷土への思い入れ

片座 晴美さん
（萩生）

真鍋博先生とは平成元年に移動図書館用の黄色い手提げ袋をデザインしていただいて以来のおつき合いでした。毎年夏場に開催される「四国フォーラム」では、「四国は一つにならなければならない」と熱っぽく語られ、私も先生とともに豊かな未来を夢見させていただきました。郷土に対して熱い思い入れ、愛情があり、夢のある方であったと思います。

移動図書館用の手提げ袋

■ホッとしたおほめの言葉

前田 淳子さん
（富山県婦中町）

真鍋先生はたいへん思いやりのあるやさしい方でした。市役所の若手が手作りで準備した「真鍋博ミニ博覧会」で、主に作品の飾り付けを手伝わせていただきました。小さなサイズの作品を組み合わせたり、展示パネルに窓を開けて配置したりと、いろいろ工夫しました。準備していたパネルが「紺」「白」「紫」の3色と限られていて、作品と背景色の組み合わせに随分悩みながらの作業でしたので、博覧会オープニング時にはドキドキしながら真鍋先生をお迎えしました。絵を志していた私にとりまして、真鍋先生から「若い方のセンスにも感心しました」と言われた時にはホッとしました。

真鍋博ミニ博覧会での準備風景

■しまなみ海道にも貢献された先生

越智 省二さん
（新居浜市建築課）

ある時、「今日は本州四国連絡橋公団の幹部連中が来るから、ゆっくりしていきませんか」と声をかけてくださいました。「先生はおもむろに愛媛に架かる大橋の図面をとり出し、「さて、どれにしましょうか」と真剣なまなざしで質問されました。美しい瀬戸内海の景観にとけ込む橋や主塔、アンカレイジなど提案された16件を絞り込む作業中だったのです。景観委員として「しまなみ海道」の全般のデザインを最終決定されるお姿を拝見し改めて先生の肩にかかる大きな期待を感じました。私たちに感動を与える「しまなみ海道」にも真鍋先生が大きく貢献されたのでした。

イラスト名刺のデザイン（生子橋）。核兵器廃絶都市宣言モニュメントの陶板デザイン。郷土美術館で「真鍋博イラスト展」を開催。図書16冊、油絵「兵隊」、油絵「腐食する風景（室内）」を寄贈。

1987年(55歳) 愛媛県立図書館で「真鍋博イラストの世界展」を開催。第6回喫煙と健康世界会議のポスターを制作。イラスト名刺のデザイン（未来都市新居浜）。山根温水プール壁画デザイン。上部児童センター外壁デザイン。市制50周年の健康都市宣言でシンボルマーク・ポスターの最終審査。「真鍋博ミニ博覧会」を開催。

1988年(56歳) 瀬戸内環境シンポジウムで特別講演を行う。移動図書館車「青い鳥号」の外装デザイン。

1989年(57歳) 「ユリイカのカット」「遊々ウォーキング」刊行。ウイメンズプラザの緞帳デザイン。ウイメンズプラザ壁画デザイン。第三次長期総合計画の表紙と内部2カット。移動図書館車用手提げ袋デザイン。

1990年(58歳) アガサ・クリスティーシリーズ全85冊のカバーイラストを納めた小冊子発行。愛媛県県民総合文化祭ポスター制作。篠場配水地、治良丸配水池のタンク壁面デザイン。

1991年(59歳) 筒井康隆の「朝日新聞」連載小説「朝のガズパール」全161回の挿絵担当。マイントピア別子のポスターと絵ハガキ制作。

1992年(60歳) 松山新空港ビルモニュメント（三美神）原案作成。

1996年(64歳) 池田20世紀美術館で「真鍋博の世界展」を開催。

1999年(67歳) 愛媛県教育文化賞受賞。

2000年(68歳) マイントピア大使に就任。新居浜市結婚記念アルバムイラスト制作。10月31日、東京都新宿区の病院で逝去。

2001年(平13) 愛媛県立美術館で「真鍋博回顧展　イマジネーションの散歩道」を開催。

せんか。

鍋博氏の作品

イラストレーター・真鍋博さんの描く未来画は、あらゆる年齢層の方々に夢を与え続けています。チャレンジ精神の旺盛な真鍋先生はあらゆるものをキャンバスに未来画を描かれました。真鍋先生の作品は、市内でも山根温水プールの壁画やウイメンズプラザの緞帳（どんちょう）デザインなど、あちらこちらで見ることができます。真鍋先生から私たちへの贈り物を訪ねて、新居浜の街を散策してみてはいかがでしょうか。

①中央公園の核兵器廃絶都市宣言モニュメントの陶板デザイン（1985年）
②ウイメンズプラザ・多目的ホールの緞帳デザイン（1989年）
③山根公園屋内プールの壁画デザイン（1987年）

市内をめぐって真鍋博さんの作品を鑑賞してみま

市内にある真

④移動図書館「青い鳥号」の外装デザイン（1988年）
⑤上部児童センターの外壁デザイン（1987年）
⑥篠場配水池のタンクの壁画デザイン（1990年）

「緑の絵の具を取ってくれ、地球のない時代を緑で描いてみたいんだ！」
生前真鍋先生は、病床でうわごとのようにそう言ったそうです。長男で古生物学者の真鍋真さんは、最後に描きたかった「地球のない時代」の意味について次のように述べています。
「地球が消滅した超未来なのか？地球が誕生する前の超過去なのか？僕は父とは別の道を行きたくて、確かな過去を扱う学問を選んだ。でも、実は同じ時間軸の端と端で、共に現在を考えているという意味で同じじゃないか。そう気づくと、父のことがよく分かるようになったんです…」
明るい未来社会を描き続けた真鍋先生。この先生の遺志を、21世紀を生きる私たちの手で引き継いでいこうではありませんか。明るい未来・21世紀を現実のものとするために…。